八丈島の仏像

工藤千尋

序

「沖で見た時や鬼島と見たが、来てみりゃ八丈は情島（しょめ節）」とうたわれているように、南海の孤島、伊豆七島の最南端である八丈島は船の上から眺めると、たしかに鬼島と見えないこともなかった。流人の島として有名である八丈島は、大島、三宅島をへて荒海を乗りこえてやってきた流人にとっては、まさに鳥も通わぬ地の果てに来てしまったという感があったことだろう。

八丈島における流人史は慶長十一（一六〇六）年に宇喜田秀家が流されたことに始まりこれが明治四（一八七一）年まで続くことになる。その約二五〇年の間には、政治の重要犯罪人あり、町人、農民ありそしてその中には、もちろん僧侶や仏師も居たのであった。

一般的に云って孤島の住人たちは、保守的、島の風習、奇習に固執しがちであって、外来者には固く身を閉ざすものである。八丈島も古くからの風俗や習慣等にこだわっていたことは本土と比べて事実であるが、しかし流人を受け入れなければならぬという重荷を、背おわされた島民たちは、以外にも貧欲に本土の様子を流人たちから聞きだそうとしたのかもしれない。小さな島で、なんの楽しみもない島生社活は、島民たちにとっては、はなはだたいくつなものであり、本土の情報を得、そして新しい文化を受け入れることに楽しみを見いだしていたといえる。したがってある意味においては、この辺地の島民たちはいたって外来者にオープンであったといえるだろう。

であるから流人の中でも学問、知識を身につけている者は寺子屋を開いて島民たちに学問を教えることもできたし、また技術を持っている者はそれを売って生活の糧を得ることもできたのである。後に出てくる唯一の仏師であった民部もこの島では多くの仏像を刻み残しているし、近藤富蔵などもなくてはならない存在となっている。

そもそも八丈島には、いったいいつ頃に仏教が伝わり、仏像がもたらされたのかということについては、まだあきらかではない。

神社信仰は他地と同様に仏教信仰よりは古くからあったと容易に想像されるが、仏教関係で最も早く登場するものとしては、後一条天皇の時代、万寿年間（一〇二四～二七）に八丈島五ケ村へ皇室から地蔵尊五体が送られそのうちの一体が中之郷御堂ケ沢に安置されたということが、旧記および口碑に記されている。この一体が現在は中之郷、大御堂に本尊として安置されている。また寺としては、現宗福寺（大賀郷）の元となる香炉山弥陀寺が承元二（一二〇八）年に源為朝の二男である次郎為宗によって父母の冥福を祈るために創建されたと伝えられる。

現在、八丈島には寺が三つ、そして仏教関係の御堂が約十あまりあるが、これらの御堂はほとんどのものが創立年代が不詳のものである。しかしいずれにしても先にあげた地蔵尊の年代よりも遅いものと思われる。

よって八丈島の仏教活動というものは、地理的に云って一目瞭然

ではあるが、本土よりは遅く、十一世紀半ばからはじまり、特に目立った点も見られずに現在に至ったといえるだろう。たしかに八丈島の寺以外にある仏像はほとんど制作年代、作者等が不明のものが多く、それも半ば朽ちかけているといった状態のものばかりで、美術史的には価値は高いとは云えないが、しかし離れ島特有の島民、流人たちの仏像に対する心に価値を見い出したい。

私が八丈島の仏像について調べようとしたのはなぜか。それは小さな写真集の一ページを見たことにはじまる。毎日新聞社刊『離島の旅（流人のふるさと）』の中に八丈島の仏像が数体、載っていた。しかも私が興味をもったのはその中のたった二体の像であった。流人仏とでも呼ぶべきだろうか。その二体の像は仏像というには、あまりにもおこがましい、まるでこけしのように単調な形、顔。木はすでに虫くわれ、顔にはかすかに目、鼻が残っている程度の地蔵形立像である。未完成か、それとも長い間潮風にさらされてけずりとられてしまったものか。それさえも判別がつかぬ木のかたまりであった。それは云わずとも知れたことである。この島に流された流人以外にだれが彫りえたであろうか。本土へ帰れぬやるせない辛さを彼はこの仏像に託したのである。これを流人仏と呼ぶ以外には呼びようがない。

そしてこの島の仏像には、半ば朽ちかけたものの他に、寺には作者のわかっているものもあった。それは唯一の仏師であった民部であるが、幸か不幸か彼も流人の一人であることには変わりがない。彼はただ単に仏師の技術を持っていたからこそ名が残り伝えられたにすぎないのだ。彼の仏像もその中にどんな心が流れているにせよ流人仏のひとつにあげられよう。

一

八丈島への調査旅行は、昭和五〇年七月初旬と十月中旬の二回行なったが、あいにくと二回目は台風のあとで御堂は破壊されたものもあって、見ることができないものが二、三あったことは残念であった。

現在、八丈島は、三根（みつね）、大賀郷（おおかごう）、樫立（かしたく）、中之郷（なかのごう）、末吉（すえよし）の五町に分かれているが、島の中心地は大賀郷、三根の一部である。しかし仏像の分布状態からいって興味深いのは中之郷と云えるだろう。

しかしまず、ここでは唯一の仏師であった民部の作品がある大賀郷の宗福寺から見ることにする。

八丈島には源為朝が保元二（一一五七）年に大島に流された後に、そこを逃れ八丈島へ渡来し、承安三（一一七三）年に八丈小島で自害したという伝説がある。宗福寺の前身である香炉山弥陀寺は承元二（一二〇八）年に為朝の子為宗によって、父の冥福を祈るために西山（八丈富士）のふもとに建てられた。しかし応永年間（一三九四～一四二八）西山の噴火で弥陀寺は焼失してしまった。当時、弥陀寺の住僧雲迦の次男が武州金川の宗興寺で修業していたが、端翁宗的と称して永享二（一四三〇）年に弥陀寺を継ぎ、大賀郷大里に寺を移し甑峯山天松院宗福寺と改めた。それから十年後の永享十二（一四四〇）年、金川の宗興寺に属して、禅宗寺院となったのである。しかし永禄年間（一五五八～六九）に伊豆下田の海善寺に属して浄土宗に改宗した。理由は不明である。その後、昭和六（一九三一）年に大里から現在地の中道へと寺を移した。

前もって電話で仏像拝観の旨を伝えておいたので、宗福寺の住職

さんはこころよく堂内の仏像を見せてくださった。

ここには仏師民部の作品が全部で七体、ほかに大きな像が二体と小品がいくつかある。

まず最初に近づいたものは民部の作品四体である。この四体というのは仏像ではなく、この寺の関係者の肖像彫刻である。いずれも木造で、高さは三〇センチメートルに満たないであろうか。それぞれの名は、応誉霊感、春誉常念、清雲信女、清誉逈雲信女である。これら四人については霊感像内に納入されていた木札などによってわかる。

霊感像内には、木札、紙片、舎利塔などが納められており、そのうちの木札には、

八丈嶋甑峯山宗福寺住呂応誉霊感禅師
御影也時貞享三丙年三月十七日遷化ス
粤元禄己卯江府之大仏師法橋民部当地
左僊之刻彫刻之施主則応誉霊感第子（ママ）

とあり、その裏には、

浅沼貞右衛門為師恩謝徳之奉造立之者也
宗福寺中興従端翁宗的十世
前住霊感第子（ママ）当代十一代
時宝永二乙酉年三月十七日願主一誉哲心

とある。つまりこれによると、応誉霊感はこの宗福寺の中興者である端翁宗的の第十世であり、亡くなったのは貞享三（一六八六）年三月十七日である。そしてこれらの像を造らせたのは、霊感の弟子で第十一代住僧である一誉哲心。そして江戸の仏師法橋民部が宝永二（一七〇五）年三月十七日に完成したものである。

そしてさらにもう一枚の木札によると、春誉は霊感の弟、清雲は妹であり、逈雲は哲心の母であることがわかる。またこれらの像は霊感の弟、妹、息子など親戚の願いによるものであることもわかる。

四体いずれも寄木造で、それがあきらかにわかるほどに表面の色は落ち、不安定な状態である。

霊感像は、ごく普通の僧形坐像で、顔はかなり色が落ち鼻を中心に中央部分は、下地の色が見えているのであろうか、真白である。表情はきつい意志の強さがうかがえ、むしろ少し怖いとでもいうべきか。手は胸前で組み衣でかくされているが、そのひだは浅く単調でなめらかである。

春誉常念像も普通の僧形で坐っており、顔等の彩色はまだ残っている。唇は赤く、目は切れ長で、眉も黒々と太く描かれて顔立ちははっきりしている。遠くから見ると一点を見つめて少し笑っているようなそんな表情である。手は衣にかくされて見えないが膝の上に置かれている。衣は全体的に線香の煙などで黒くなっていたり、またはげ落ちて地の白い部分が見える所もある。背中には、まっすぐに寄木の跡がはっきりとあらわれている。後ろ姿は両者ともほぼ変わらない。

なお、この二体は台座ではなく背もたれがついた倚子の上にすわっている。

そして清雲信女像は、少々変わった頭巾をかぶりやや下を向いて左横に坐っている。ひじから先の部分、つまり寄木でつけてあった部分が両手ともなくなっており、色の落ちもはげしく背中には二本縦に寄木のあとが認められる。しかし衣にはかすかに文様の跡が見

られ、左胸あたりは朱色に点々でもようが、つけられている。顔は体の大きさの割にはやや小さめで、やさしい笑いがもれている。口をわずかに開き、細おもてではあるが丸味のある顔立ち、若い女性の新鮮さとあたたかみがうかがえる。

そして清誉逈雲信女像は、お高祖頭巾のようなものをかぶり、その布は頭から静かに、前胸へとたれている。手は前で合掌していると思われるが、手首から先がなく、それはちょうど衣の部分だけで終わっている。膝は前の清雲信女と同様に、左に膝を出して坐り衣が脇にたれている。ところどころ欠けている部分があるもののこれにもはっきりと背中には文様のあとが見られ、六角形の組み合わせやまた格子もようをしている。衣は全体的に朱色と思われる。後姿は頭巾のしわが全くなく少々固いかんじがする。顔の表情は、唇をやや開き笑を浮かべるが、前者ほどの静けさは感じられない。

以上、四体は肖像であるが実際に生きていた人間を彫っただけのことはあって、民部の他の像とはちがったあたたかみが細かく刻みこまれているようである。

他に民部の作品には「誕生釈迦仏立像」がある。これは高さ三〇センチメートルに満たない小品で、一木造りである。背面には、「理覚院妙玄比丘尼　宝永元甲申歳四月八日於江府住生　同二乙酉当一周忌為母八丈島ニテ彫刻之　江府大仏師菊池民部」と刻まれてある。右手を上げ左手は人差指をのばして下げ肉付きのいい体に腰巻きをし、前で結んでいる。この像は全身に細かいノミのあとがある。右腕には、継ぎ目があり台座は右側が少し欠けているが、これは現住職の時の嵐によるものである。

この像は、彼の母親が宝永元（一七〇四）年に江戸で亡くなったのであるが、彼はその時この離れ島に居り、結局一通の便りさえも出さずに終わってしまった。この親不幸を詫びるつもりで、翌宝永二（一七〇五）年に彫られたものらしい。彼はこの時四十八歳であった。いわば民部が、もっとも心をこめて彫ったものであろうか。

なお、これと同じものが中之郷・長楽寺にもあったらしいが戦災で失なわれてしまって今はない。

次に「釈迦如来坐像」があり、これは高さ五〇センチメートルぐらいで、全身ほぼ黒、施無畏、与願印を結び結跏趺坐している。胎内には、木札二枚と紙片一枚が納められている。そのうちの一枚によると、「元禄拾三庚辰四月十九日　釈迦之像座像壱尺五寸　武州江戸住八丈嶋流罪之砌四十四歳二而新造　運慶末流　大仏師民部造之　手伝八丈嶋女なか」と記されている。すなわち、自ら運慶末流と称する江戸の仏師民部がこの島に流されて元禄十三（一七〇〇）年に、この寺のためにほったものである。彼は、その時四十四歳で「手伝八丈嶋女なか」とあるのは、彼の水汲(住)女である「なか」という女性に手伝ってもらったものであろう。

この像は、寄木造であるがあまり破損のあとは見られず、ただ右胸と裳先が欠けているだけである。顔はゆったりとのびやかではあるが、角度によってまた違ったおもむきがある。螺髪粒は大きく、全体的に大まかに彫られているが、それほどの大らかさは感じられない。

なお、もう一体民部作といわれている小品「釈迦如来坐像」がある。この像の中には、紙片一枚があり、法華経の句、結縁交名を記してある。さらに「元禄十二己卯十二月十一日書之」とあるだけで、民部の名はどこにも見えないが、同年十二月といえば三宅島を

へてすでに八丈島へ到着しているはずであるし作風、つまり螺髪や衣のかんじなどから見ても民部の作品として良いであろう。彼が、この島に来て最初の作品と認められる。しかし、前記の釈迦如来坐像と比べて、眉、唇のかんじが少し違うような気がするし、また「小さい」という印象を強く与える。

高さは二〇センチメートル位。色は、線香の煙などでまっ黒であるが金が塗ってあったのだろうか、首の裏、衣のひだの奥などに、金色をとどめている。また細かなノミの跡がうかがえる。これは寄木造で、丸尾彰三郎氏の調査報告（昭和三十三年）では、膝部寄木を全く逸失しているとあるが、現在はちゃんとついており住職さんのお話によると、しまってあった箱の隅の方にあったということである。

なおこの像の台座は、衣のたれ下がった線が全くちがうことから、別のものであるが、真中にはこの島で勢力を誇っていた家の一つである菊池家の紋が入っている。

以上で、民部の作品を終わる。

次に、この宗福寺には快慶風の木像「大日如来坐像」が一体ある。これは寄木造、玉眼漆箔で高さは六〇センチメートル位である。本島の彫刻中最古の木彫といわれ、もっともすばらしい作品である。丸尾氏によると、鎌倉時代末期の作で内地の中心地（近畿）に近い所でできたものらしい。ただ偶然にこの島に伝えられたのだろう。

体内の木札には「大日如来　安阿弥之御作
御長け座像壱尺五寸　元禄十三年辰四月十九日」「修覆仏工　武州江戸住　大仏師民部　四十四歳　八丈島流罪之砌再興之」とある。つまりこれは、安阿弥快慶の作で大仏師民部が元禄十三（一七〇〇）年に、修覆したということで、実際に快慶の作品とは思われぬが快慶風の作品であるといえるだろう。

この大日如来の台座は、前記の民部作釈迦如来像のものと全く同じである。蓮花二重座で反花がついているだけの簡単なものであるが、どっしりと重々しいかんじがする。これは民部が釈迦如来像を造った時に、またこの大日如来の台座をも造ったのであろう。ただ違う所と云えば、中央についている小さな紋様がちがうだけで、釈迦如来の方は花のようなもの、大日如来の方は卍である。

以上、民部の作品と、彼に関するものであるが、民部が島に居た時代つまり一七〇〇年から約一〇年ほどの間にこの宗福寺の堂内はかなり整備され、りっぱになったはずである。仏師が流されてくるのを待っていたかのように新しい像が造られ、修理された。霊感の弟子である哲心の努力であろうか。

また、この堂の中央には本尊である高さ、台座とともに一・五メートル位の阿弥陀立像が立っている。金箔は衣と台座の一部に残っており、黒く光っている。寄木造で左胸が少し欠けて中の空洞が見えている。手は施無畏、与願印を結び、衣の線はやさしく足にそって自然に流れている。目は玉眼と思われる。この像は、大きさもあるせいかまた色のせいでもあろうか、かなり堂々とした感があって、落ちついている。しかしそれ以上にこの像には全体的に均衡と調和の美しさがある。形式的にもしっかりとしており、島の作品ではなく文化の中心地の作であると思われる。鎌倉時代の作とも云われる。なお、この像は三尊像であるが、脇士は右の一体しかない。

また、この寺の主なものとして、小品ではあるがまとまった「阿

弥陀三尊立像」がある。これは中尊立像が二〇センチメートル位のもので小さな御堂に入っている。光背は舟形で脇士ともにずれ落ちている。中尊はかなり複雑な蓮花五重座の上に立ち、色も残って衣には細かなもようがある。衣のしわはたいへん厚ぼったく大まかで重いかんじである。顔は玉眼と思われるが、唇は厚く全体的に太めで肉付きがよい。日本的というよりも少々異国的である。また脇士の方は、二方とも腕が欠け落ちており小作りである。これも全体的に太めで顔はキツネのような冷さがある。しかし、この三尊は調和がよくとれており台座もりっぱで、これもまた内地の作品と思われる。

他にも、宗福寺には数体の像があり、石、木造などさまざまで、完全に中国的なものもある。しかしどれも、歴史、作者等があきらかでなく特に記す必要はないと思われる。

同じ大賀郷地区で宗福寺から、ほど遠くない所に釈迦堂がある。釈迦堂へと通ずる道はまわりに鬱蒼と、木々草々が茂りかすかに歩ける程度の荒れもようであった。途中には民家が一軒とヤギが一頭居ただけで、島の人々でさえめったに足を運ぶことがなく、むしろ知らない人の方が多いという所である。境内には草が生い茂り、堂内とても同じように、今にもこわれそうといった感のする小さな小屋とでも云うべきか。勝手に上がりこんで、真暗な中で懐中電灯の光を頼りに、目を大きく見開いていたということは容易に想像できると思う。

前に八丈島に仏教関係のものが最初にあらわれるのは、後一条天皇の万寿年間（一〇二四～二七）に地蔵尊五体が送られたことと、そして宗福寺の前身である弥陀寺が承元二（一二〇八）年に建てられたことを記したが、しかし、最初に本格的に僧によって仏教が伝えられ堂が建立されたのは、この釈迦堂であるとされる。八丈島の仏教は、現在浄土宗に属するものが多いが、この釈迦堂は禅宗の僧によって、永享年間（一四二九～四〇）に建立され、相模国宗興寺から釈迦三尊像を迎えて安置されたといわれ、この島の第一号の寺院であるらしい。もっとも現在の堂は、後世に新しくつくられたものである。

この堂内には全部で四体の像がある。一つの厨子に三つの窓があり、中央から一見したところでは三体の像しか見えないが、一番左には羅漢像、そして真中には菩薩坐像、この二体の間に、陰にかくれて見えない十一面観音坐像、そして一番右側にまた十一面観音坐像とがある。

ここの羅漢像は木造で、非常に形の珍しいものである。しかし私が懐中電灯をもってこの羅漢様を照らし出した時には、まず虫食いのひどさにおどろいてしまった。可哀想にも彼は一応形だけ木の台の上にのっており、下の部分はボロボロで小さな穴だらけ、そして前に倒れかかっていたではないか。そのうえ頭部の虫食いもはげしく、みじめそうに目だけをギョロつかせて悲しそうにこっちをごらんになっていた。

この像は、高さ二九センチメートルの坐像で法衣の上に西洋風のマントを着て、耳にはイヤリングをしている。こういった形は、日本ではめずらしく他には、長崎・崇福寺と盛岡・報恩寺にあるということである。また、「支那文化史跡概説」によると中国の広東・華林寺、杭州・梵天寺、楊州・天寧寺等にもあるらしい。もちろん

作者も、制作年代も不明であって「八丈実記（近藤富蔵著）」によると、元禄七（一六九四）年に海中より拾い上げたとあるので、おそらく難破船、それも中国の船によってもたらされたものであろう。

さて、その右側に陰にかくれている十一面観音像と一番右側にまた十一面観音像がある。いずれも木造で、高さは二〇と三五センチメートル位であるが、双方ともに虫食いがはげしく色はほとんど落ちていて形をわずかに残す程度のものである。腕はもうないようだ。頭部の十一面は形ばかりニョキニョキとはえており、目鼻もよく判別しかねる。これは、ここの管理の悪さと、そして長い間、風雨にさらされたこと、またこういった御堂がオープンに島民たちに開放されていたことの結果であろう。名も知られぬ島民か流人が彫ってここに納めたのだろうか。

そして真中には、ようやく仏像らしき仏像が安置されている。台座に坐り、飛天光背を付け、全体的に茶色ではあるが色はかなり残って輝いている。光背ともに三五・六センチメートル位の小品で台座は蓮花数重座である。そしてこの像は説法印を結び、納衣をまとっているが、しかし宝髪をつけるといういささか変わった姿をしている。それに頭が少々大きく、顔もやせすぎで全体的に落ちついた像ではないようだ。

こういった、いいかげんな像が真中に、そして虫食いだらけの像が両脇に置かれ、この島の文化そして宗教の一面を見ることができたようだ。そもそも、島民たちの中で本土の寺にあるような堂々として、りっぱで形式的な仏像を見たことのある人はごく少ないのだろう。だから、宗福寺にあるような一応仏師が彫ったものも仏像であったのだし、ここにあるように形がそれらしいものもまた仏像であったのだ。造った人々とて、島民、流人と本物に対しては無知な人々であったろう。ただ単に、偶像崇拝の対象としてそれはそれらしくありさえすればよいのであって、作者がどうであろうとかまわないのである。この島の仏像は、すべてはそういった島民たちの根底に流れている意識の上に存在する。決して仏教によって政治的に制圧されることはなかったのだし、江戸時代になってから流人を受け入れねばならなかったということ以外にはこの島は独自で生きてきたのである。その上漂流船との出会も多く、先の羅漢像以外にも海の中からの拾い物で、変わったものも数多く存在する。島民たちの楽しみといえば、あきらかに外の情報を得ることであった。

よって、この島の仏像には名も知られぬものが多く、形式も一定していないが、それだけに自由で人間味のあるものが多いのだろう。もっとも本土で、つまり京都や奈良で仏像を長年見てきた私たち現代人にとってみれば、これらの仏像は貧弱で、薄っぺらなものとして目に写る場合の方が多いかもしれないが。しかし、仏像存在の価値というのは、その土地に住んでその仏像に接してきた人々が決めるのであって、現代のそれもいろいろな像に自由に接してきた我々が決めるものではないのである。

（註）

水汲女水婆というのは流人の内縁の妻である。この島では、水を汲みに行くことが朝夕の女の仕事のひとつであった。流人を異人扱いしなかった島民たちであったから、流人は妻を持つこともできたのであろう。これによってこの島での流人たちによる犯罪は少ないという。なお、民部の水汲女であるなかという女性は、先の霊感和尚の二男浅沼貞右衛門の二女であ

るという。

二

次に、三根地区のこれまた山を深く入った所に、八丈八景のひとつである「尾端夜雨」の尾端観音堂がある。この観音堂も創建年代は不明であるが、現在の建物は、百年ほど前に浅沼源太夫という人によって建てられたものらしい。

この建物も見たところ、管理人不在の御堂であるのか戸は開け放たれ、周囲には草がうっそうとおい茂り保存状態はかなり悪いと見てよい。また、ここでも私は勝手に上がりこんで、ささやかな仏像たちと対面することとなった。

ここには全部で五体の像があるが、向って左より、観音立像、菩薩坐像、阿弥陀坐像、阿弥陀立像、そして一番右に観音立像と並んでいる。いずれも木造で、大きさは三〇センチメートル前後である。

特に中央の阿弥陀如来像二体などは、色もよく残って金色に輝いている。これらは、光背も二重円光背、また台座なども複雑でよくできている。この二体は、様式もしっかりとしており、江戸の仏師の作を求めてきたものであろうか。

また、かならずしもそうでないものもある。特に一番右にある観音立像などは、身体の割には頭が大きすぎ、衣の線もやぼったく太りぎみで、顔は素朴な田舎ムードをただよわせている。これの光背は、流人近藤富蔵の作と思われる。

ここには、他にも富蔵作といわれる台座、光背がある。

なお、昭和三十三年の丸尾氏の調査報告と現在とでは、真中の阿弥陀如来坐像の光背と台座の位置が全くちがっているようである。つまり、丸尾氏によると、真中の阿弥陀坐像には光背がなく、そしてその左の菩薩坐像には光背があるとされているが、現在は阿弥陀坐像にはりっぱな光背がある。ということは昔の資料に重点を置いて考えると、この阿弥陀像と菩薩像は、光背と台座をそのままにして、現在の両者の位置を交換しなければならないのだ。それにしてもこの両者、一体だれがいつの間に動かしてしまったのか。おかしな話である。

三

さて、三根地区から大賀郷へもどり、右に八丈小島を見ながら大阪トンネルをくぐると樫立地区がある。

ここは、八丈五町の中でも一番小さな町で不動堂がただひとつあるだけである。非常に運悪く、台風のあとの不動堂はすでに全壊していたのであった。しかし幸か不幸か、すぐ隣りにある金比羅堂の方は新築されたばかりで、壊されておらず、私が訪れた時には、不動堂の像たちはこの金比羅堂に仮に納まっていたのである。

本来の不動堂には二組の像がある。

そのうちの一組は、不動三尊坐像である。この島において不動像というのは少々珍しい。多くのものは、如来、菩薩像であるが、これも内地作であるためであろうか。

さて、箱に納まったこの三尊は、中央の不動様は高さ二五センチメートル、脇士は台座とともに二四センチメートルでそれぞれ一木造である。

中央の像は色は全く残っておらず、木の地肌がそのままで色がぬ

ってあったとは感じられない。いたって丸みがあり、髪も全体的にひとつで、顔にはしわもなく、また衣にはひだが全部で二、三本あるのみでごく簡単である。そして腰から下の部分つまり足は衣にかくれているが平坦で、坐っているようには見えない。腰からすぐ地についているようである。顔は一応目をむき、口をへの字に結んでいるものの、緊迫した強さとか怖さは全くなく、怒怒の顔とは云いがたい。台座は、岩座で白と緑で荒々しく彫ってあり、また火焔は木でうまくつながっているが固い。

さて脇士であるが、どちらが右でどちらか左にあるものかはわからない。しかし、この二体は小さいながらもよく出来ている。一方のものは、右手を下に下げ、左手を上にあげているが現在は左手は肩から先がない。顔は、左手方向に向け、腰をひねり両足でしっかりと立っている。表情は先程の不動像より描写力にとみ、全体的に丸いかんじはするものの口を強く結び、顔をひきつらせているのがわかる。髪の毛は肩までたれ下がり、筋肉や衣の線も自然で写実的である。色もほとんど落ちてはいるが、顔は赤、肌は朱色、衣は白、茶、緑等でひだごとに塗りわけられている。

また、もう一方の脇士は、髪の毛は真中で分けて腰あたりまで長く自然にたらし、両手を胸で合わせ左足に重心をかけながら、少し下方を見つめる。顔の表情は、口をわずかに開き、目を細めて如来のようなそして女性的なやさしい顔立ちである。全体的に見ても女性らしく美しい。これも色は少しこびりついている程度であるが、顔、胸等は白、衣は朱、緑と少しづつ残っている。

総じて、この両脇士はバランスが良く、小さいから細かい部分まで手が行き届かないにしても、衣などのひだはやわらかく自然にできている。少々かわいらしく幼稚なかんじはするものの、中央の不動像と比べて出来がよく、これらを一対とするのは合点が行かないような気もする。それに、不動像には何一つ色がないし彫り方も粗雑であるから、この像だけ別なものをこの岩座においたといっても過言ではないだろう。

そしてここにあるもうひとつの像とは、阿弥陀如来坐像一体である。これは寄木造で、腰から下の寄木部分を完全に欠損しており、元の姿はたぶん四〇センチメートル位の高さのものであったろう。箱に納まり、台座も全体的にいたんでいる。像自体もいたみがはげしいことは伝うまでもないが、顔、胸に金箔が残り、胸は下地の茶色が見えている。そしてこの像は、後に記すとおり名のある仏師の作品であるように、、玉眼で螺髪も一つ一つ渦を巻き、衣のひだも厚くやわらかく自然である。顔は右目上が少々欠け、首が沈んでいるが、豊かな肉付き、上品な口元、やさしいまなざしといい、知的であたたかみがある。完全な姿であればさぞ立派な良いものであったろう。下部が欠けているのが残念である。もちろん内地で買い求めたものであろうが、この島の小さな御堂にあるものとしては、めずらしく良い作品といえるだろう。

なお、欠けた部分から空洞の像内をのぞいてみると次のように墨書きしてあった。「元禄八乙亥七月十九日　南無阿弥陀仏　洛陽大宮大仏師　桜井右近作之」つまり、これは元禄八（一六九五）年に京都の仏師である桜井右近の作品である。おそらく、島民のうちのだれか、たぶん中之郷大御堂の例にもあるように、御船預りのような人が買い求めてきたものだろう。

四

さて、樫立をすぎてさらに先へ進むと中之郷がある。ここは島の中でももっとも田舎に属すると思われるが、しかし仏像としてはかなりいろいろなものがあって興味深い所である。

この地区の寺である長楽寺は、今はコンクリートの建物で、およそ風格と歴史の寺とは云いがたい外観を見せて立っていた。この中之郷向里にある長楽寺は、はじめ真言宗で、正平五（一三五〇）年に上杉氏の代官奥山氏が大賀郷楊梅宗に建てた祈願所で、大和の国広瀬興楽寺の勢遍法師が渡島して、放光山大善寺と号した。そして明徳三（一三九二）年に漂着した明船に、僧宗閑とその弟子の宗有とが乗っており、代官奥山伊賀は宗閑を住職として十三世におよんだという。天文一六（一五四七）年、また明船が漂着し、その時に乗っていた明僧の林氏宗感に、時の代官菊池武蔵が厚く帰依し、楊梅原から同じく大賀郷大里に寺を移して長楽寺と改名したのである。またその後に、元禄の頃、心誉長円が下田海善寺において宗派相伝し真言宗を改め浄土宗とし、海雲山相伝院長楽寺と号した。現在地中之郷に移ったのは、明治二六（一八九三）年。なお現住職の二代前から、明僧林氏宗感の名をとり、姓を明林（みんばやし）としている。そして昭和二〇（一九四五）年、この寺は米機の爆撃にあい焼失してしまい、このため仏像は現存の一体を残すのみとなってしまった。現在は鉄筋コンクリートの建物である。

ここには本尊である観音立像一体である。銅像で、高さは約九〇センチメートル。ほとんど真黒ではあるが、金箔押であったろう。金色が、顔、胸、手、足などにわずかにへばりついている。船形光背ともに形をきれいに残し調和がとれている。衣の線などは厚いが肉体などはほっそりとへんぺいで、顔は細く鼻が異様にとんがっているのが目についた。

なお、この像の背部には「寛政元己酉歳九月　施主　八丈島御船頭山下与左衛門茂実」とあり、また光背裏には「奉造建　施主八丈島御船預り　山下与左衛門茂実　時干寛政二庚戌年三月吉日」とある。つまりこれは時の御船預り（註）であった山下与左衛門茂実が、寛政元（一七八九）年に、江戸で造らせて買い求め同二（一七九〇）年に持ち帰って寺に寄進したのであろう。この江戸注文については、大御堂にも像があるので後述する。

そして今はもう焼失してしまったが、他に民部作の観音立像と誕生釈迦仏があったという。住職さんのお話によると、観音立像は、今残っているものより小さく木造で、中には開祖としている宗感の像と置文があったという。置文は八丈実記によると「観音造立躰中記（中略）元禄十四辛巳仲夏吉旦　願主　海雲山長楽寺現住　学誉道本記　大仏師　法橋民部」とあるらしい。また誕生釈迦仏の方は現在宗福寺にあるのと全く同じものである。

これらのものが今も残っているとしたら、民部の作品を調べる上でさらに新しい面がわかったであろうに残念である。特に、民部が母の死に対して親不幸を詫びるつもりでつくった誕生釈迦仏が、もう一体あったとは。やさしい人である。

さて、長楽寺を出て坂道を登り太い通りに出ると、すぐ脇に、釈迦堂がある。残念ながらまたここでも本島をおそった台風のひどさに驚かずにはいられなかった。全壊していなかっただけ、救われたのであるがしかしこの日も風が強く、壊された部分には厚いテント

がおおわれており、私のためにこのおおいをとりはずしてもらうわけにはいかなかったのである。よって窓から背のびをして、のぞくはめになってしまった。

かなり大きめの釈迦如来坐像一体。木造で高さは九〇センチメートル位。胸で合掌する。まさに新しいという感じで、顔、胸などは、はげることなくきれいに金色で輝き、衣の部分がやや茶色にはがれているという程度である。螺髪もまた鮮やかな青で、目、眉などもきれいに描かれている。この島のものとしてはめずらしく完全な姿で整っている。

もちろんこの島の作品ではない。由来によると、幕末の頃に沖山又衛門という人が神湊（かみなと）で漂流していた箱の中にあったのを見つけたものらしい。最初は、大御堂にまつり、後にこの像が現在地に帰りたいというので移したいという。しかしこの話は、全く確かなものではない。神湊とは三根にあり、いわば中之郷とは、島の表と裏の関係にある。

管理人のおばさんのお話によると、この像は後世に色を新しく塗るために、内地へ送ったという。これは本当であろう。仏師の作品で江戸時代のことであると思われる。金箔といい、螺髪の色といい、顔の表情といい、どぎつさが目についた。

この通りを少しもどってさらに登っていくと、黄八丈の染元、山下めゆさん宅がある。めゆさん宅には、三体の像があり、これらの像にとって私は何十年かぶりの客であったらしい。

観音立像、一体、石造でたいへん重い。約三五センチメートル。素人の作であろう。たいへん異国的な顔で、観音様とは云っても、髪をただ結い上げてあるだけの簡単なもので衣のひだも全くない。左手を胸にあて、右腕をのばして手の平を見せる。頭が大きく胴が長く手が大きすぎ、無恰好である。細かい部分には全く気を使われていない。背面には、「万治三庚子年六月十八日」「仙洞与惣右衛門」とある。万治三年とは一六六〇年、船雪の与惣右衛門がつくったということであろうか。

そして同じく石造の僧形坐像がある。約三〇センチメートル。まあるい顔に無厚い手が胸元で合掌し、いかにも素人作。いたって単調な線で、これにも背面に「寛二年」「与惣右門」「七月十五日」る刻する。寛二年とは年代的に考えて、先の観音立像の万治年間の次の寛文二年（一六六二）年のことであろう。同じ与惣右衛門の作であろう。

二体ともに古いものであるが石造であるせいか、欠けている部分は全くない。

また、もう一体めずらしく、葬頭河婆坐像がある。木造で、高さは約三〇センチメートル。朱色が残っている。眉は太く、目が大きくとびだして左膝を立て、胸をはだけて一応それらしき恰好はしている。一生懸命恐しさを出そうとしているのであろうがかえってアンバランスでおかしさが漂う。大まかに彫ってある。背面には「寛永年中中興元所造立　明治九丙子春十一代与平兵十郎　造立」、像底に「勝船頭与三右衛門」とある。寛永とは一六二四～四四年であるが、この頃造られたものか。そして、流人近藤富蔵がこの家が火災にあった後に一部を修理したと伝えられる。

さて、めゆさん宅を出て坂を下り海の方へ行くと、大沢元四郎氏宅が見えてくる。大沢さん宅には、民部の他に名ある人の作品として、近藤富蔵の一木造、阿弥陀三尊立像一体がある。

近藤富蔵は文化二（一八〇五）年五月三日江戸で生まれ、父は千島、エトロフの探検で知られた近藤重蔵である。彼は当時、勘当同様の身ではあったが、隣家と地所争いをおこしていた父重蔵を助けるべく、江戸に帰ってきたものの、しかしそれはうまく行かずに隣人塚越半之助一家七人を皆殺しにしてしまったのである。文政九（一八二六）年五月十八日、二十一歳のことである。そして翌十（一八二七）年四月に、八丈島へと流されることになった。それからの、赦免が訪れる明治十三（一八八〇）年二月二六日まで、五〇年以上もの間人生の大半を、彼はこの島で過したのであった。在島中、彼は罪を後悔し殺生を一切禁じたという。また、学問、知識のあった彼は不器用ながらも、仏像、絵画、石垣、彫刻、和歌、俳句などを残し、多方面にわたって島の人たちに貢献したのである。そしてその中心となるものは、八丈島のすべてを記録した「八丈実記」六九巻である。彼は、明治十三年赦免となっていったん江戸へ帰ったものの、その後明治十五年再びこの島の土を踏んだ。そして明治二〇（一八八七）年六月一日とうとうこの島で亡くなった。八三歳である。

さて、富蔵が残した仏像は、木造で高さは三三センチメートル。中央に阿弥陀如来立像、脇士に観音立像、そして光背が一体となった浮彫りである。写真で見たかぎりではある程度大きなものであろうと思われたが、実際には三〇センチメートル程の小さなものであった。いかにも素人作である。あまり切れ味の良くなさそうなノミ、やすりもまだ完全ではなく、まるく仕上がっておらずにとがって、線が何本もはいっている。螺髪、白毫なども完全には丸くなく大きく、衣や手などもそれらしくなく一応形だけになっている。全体的にずんぐりとして、向って左の観音様などは首がまるでなく猫背でおかしい。足元は花もようの浮き出た台の上に立っている。お線香の煙で、真黒ではあるがそれでもへこんだ部分は金色に輝いている。像の裏には「明治十年七月　八丈中之郷六十三戸　大沢六三郎同妻菊池伊佐起立　七十四翁有无莽不明作」とある。大沢六三郎とは元四郎さんの曽曽祖父にあたと人で、菊池伊佐とは妻の名である。また有無庵不明とは富蔵のことである。そしてこの裏の上部には、すでに黒ずんだ二センチメートル四方ぐらいの紙がはってあり、これをはがすと「富蔵」と墨書きしてある、と元四郎氏は教えてくださった。元四郎翁は、かなりのお年でお耳が遠く、満足にお話ができなかったのが残念であった。

このように、この像は小さくていかにも幼いのであるが、しかししみじみとしたあたたかさを感じないわけにはいかなかった。お顔だって、目ははれぼったいし、唇は薄くていびつだし、首もなくて無恰好なのだけれど、外見や尊さなのではなくて、無器用なノミの跡に彼のやさしさを感じるのである。彼の長い流人生活の中の悲しさや辛さではなく、ただ島を愛した富蔵自身の浮き彫り像なのである。

私は、今回島を巡り歩きながら、富蔵さん富蔵さん、ということばを数多く聞いたような気がする。彼は多くの所に遺品を残した。大御堂の厨子も彼の手によるものである。山下めゆさんの葬頭河婆像を修理したのも彼である。また、服部屋敷（樫立）の石垣を築き八丈凧を考案し、詩を読み、絵を描いた。いたる所に彼の足跡が見られ、島民たちは彼になれ親しんだのだろう。

そしてまたここに、富蔵の遺品をひとつ、絵画ではあるが、記さ

ねばならぬだろう。大沢元四郎宅には、屏風六曲のものが一つある。左端に、元四郎さん宅の納屋が、中央では牛や馬を使って稲を植え、そして刈り取っている農民たちが描かれている。中之郷の風景である。昔はこの島も平地部分では田んぼをつくっていたという。山があり、道は曲りくねり、広い大地と島の狭さを感じさせる。人々は動き働き、汗を流し、のどかな田園風景である。人の動きやこのうすい色彩を見てすぐに感じたことは、あの「信貴山縁起絵巻」であった。そこには生きている人間が動いていた。

富蔵はやさしい目をもった人間である。彼は熱心な仏教信者であったらしいが、彼にとっての仏像は、決して光でもなく、力でもなく、ただやさしさと親しみであったのだろう。彼の残したすべての物の中に、島民たちを愛し、そして愛された彼の姿を感じるのである。

さて、大沢氏宅から五分も歩くと民家が立ち並ぶ中に、大御堂がある。すぐ隣りの家の人が管理人であった。もっとも管理人といっても御堂の中を清掃するぐらいのことで、詳しい話などわかるわけではない。管理人のおばあさんにこの御堂を見せてほしいということを伝えると、おばあさんは黄八丈の糸を巻いていた手を休めて、戸を開けローソクをともしてくださった。そして、先代のおじいさんが生きていたらもっと詳しい話をしてくれるだろうけれど、と云いながら彼女も彼女なりに、ごく簡単ではあるがこの御堂についてのお話をしてくれたのであった。しかし、失礼ではあるが、そのお話は結局ガイドブックにのっている程度のごく一般的なものでしかなかった。私はここで、早々とおばあさんには家へとひきとってもらい、自由に像を見ることにした。

この大御堂も建立年代は不明であるが、ただ先にも記したように、万寿年間（一〇二四～二七）に八丈五ケ村に地蔵尊五体が送られそのうちのひとつが、現在この大御堂にある。この地蔵尊は、はじめ御堂ケ沢という所に安置されたのであるが、それは後に火災にあい今より約六〇〇年前に大御堂に移されたという。よってこれが正しければ、この建物は六〇〇年前、約一四〇〇年頃には存在したということになる。またここには、「徳治二（一三〇七）年丁未三月二日」の銘がある鉦鼓があり、これは八丈島最古の金石文とされているが、その時にこの大御堂が存在していたかはあきらかでない。

ここの本尊は、先に記した皇室より送られた地蔵尊でこれにはある云伝えがある。つまりこの像を拝するうちに、瞳が白から青に変わりさらには輝きだすという。また永い間の香の煙にも変化を見せず、村内に飢饉やなにかの異変があれば、顔を青くして汗を流すと伝えられている。

この地蔵様は青白い石で出来ており、木の台座にすわり、高さは四〇センチメートル位であろう。いたって丈夫そうで首も太く体もふくぶくしい。さすがに、この島で異変や疱瘡が流行した時には汗を流すと云われるだけのことはあって、健康的かつりっぱな目をしている。お顔だけ彩色されていて、少し赤茶色を呈する。よくある達磨のように、大きく目を見開き、わずかに視線を下方内側へと向けている。唇は厚く、とぼけた人間味と大らかさをもった顔である。身体の方にも色はあったかもしれないが、しかし今は全くその跡がなく、この像の伝説から考えても色がぬられていなかったと見る方が妥当だろう。この台座はもちろん皇室から送られたものとは

別なものであろうが、単調なノミで細かくもようが刻みこんである。簡単なものである。

さて、その左側に珍しく形がととのい、ほぼ完全な姿で保存されている阿弥陀三尊坐像がある。銅造で中尊坐像は三五センチメートル、脇士が二三センチメートルである。かなり緑青が浮き出てはいるものの姿は完全で、木造でなかったことに感謝すべきだろう。

中尊は蓮花三重坐にすわり、説法印（上品下生）を結び、螺髪粒などはやや大きめである。右脇士菩薩は胸で手を合わせ、右膝を立て、天衣が体にまつわりついている。また、左脇士は胸より少し下方で合掌し、同じように左膝を立てて坐っている。三尊とも光背はめずらしい形で、後方円の中心より外側へ向って太陽の光のように棒がとびだしている輪光背である。またこの三尊は山岳形とでも云うのだろうか、山のような形のもので囲まれている。いずれにしても、この三体はそれほどふくぶくしい顔ではなく、むしろ目や唇など小造りであるが、しかし他とは比べものにならないほどに三尊が完全な姿で残っていたので、すごく威厳に満ちたものに感じられがちである。この像が、島に置かれた当初は皆から崇拝されたであろうと思われる。

また、この像の台座には銘文がある由で、その謄写本によると次のようなことが記されている。「奉造立大施主元奥御右筆久米新助法体了円　安永九年庚子八月吉日　世話人八丈島御船預り山下与左衛門茂実　江戸神田住鋳物大工長谷川形部正秀作」とある。これは江戸の鋳物大工長谷川形部正秀の作で、作らせた人は久米新助。それを御船預りであった山下与左衛門茂実が持ち帰り、安永九（一七八〇）年に寄進したのだろう。

こういう例が数多くあるように、仏師民部の他に形式がととのっているものは、ほとんどが江戸へ行って買い求めてきたものばかりである。

さて、本尊である地蔵様に向って右側の厨子には、ところ狭しと全部で九体の像が安置されている。そのうちの三体は阿弥陀三尊像である。木造で中尊坐像は、台座、光背ともに四〇センチメートル。脇士立像は、光背は落ちており、台座とともに二五センチメートル程度のもの。中尊高背裏には「光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨　明治八年為造久五郎」とある。明治八年の作か。

この阿弥陀如来坐像は、蓮花三重坐にすわり定印を結ぶ。輪光背は、頭後方にまるくあり、金、朱、紺等でぬりわけられている。金箔押であって、まだだいたいは残っているが胸や顔などは、はげ落ちてみじめな姿である。また鼻が欠けている。

脇士にも金箔がかなり残っているが、これも用心しないとポロポロと落ちそうである。これも蓮花三重座に立ち、宝冠も衣もかなり簡単なものである。小品のせいであろうか。顔は墨で眉、目が描かれ、唇は赤く、光背、髪の毛は青である。両者ともに子供のような非常にひょうきんな顔立ちであるが、笑っておらず、どこか静寂さというものに欠ける。少々ぬけたとでも云おうか。

他の技術的な面は全くわからないが、このようなやすらぎのない表情、ただ目をむくだけの表情というのは、とてもプロの仕事とは思えない。この三尊を本土の作品と見ることも可能であるが、しかしもしそうであるとしたらかなりの最下級品であろう。もちろん、作品の様式、表情はどうであれ、いいかげんでない形式は島民たちには造り出すことができないものである。明治八年、すでに仏像制

作の時代は終わっているとはいえ、ひどい作品をつかまされたものだ。とくに、この脇士はじっと見ているとおかしくなるくらいひょうきんな顔であるが、しかしそれは「木喰」の微笑につながるものでもなく、自然とこみ上げるやすらぎの笑いでもなく、ただ目の前に居る人に途方もなくひどい顔をされた時にこみ上げる単なる笑いなのである。あとからひどいものを見てしまったと、目をおおいたくなるようなそんな笑い。拝むべき対象とは云いがたい。時は明治八年、流人制度も取りはらわれ、無知な島民とてもそろそろなんでもかんでも受け入れるという体勢を変えてもいいはずだ。

また、この三尊像の手前には三体の小品があり、そして一番後ろにはまるで幽霊のように暗闇の中に三体の像がぼうっと立っている。六体とも未完かそれとも年月にさらされたのか、形がはっきりとしない。

この前の三体は、共に一五センチメートル位で虫食でいたみがはげしい。頭と胴体があり、台座に坐っているのがかすかに想像がつく。手の位置は全くあきらかでない。単にでこぼこした木が三個あると云うべきか。しかしなんともかわいらしく、こういうボロボロになってしまった木の仏像の形になりたいといういちずな心が感じられるような、そんな気がしてくる。近藤富蔵の作であるらしいとおばあさんは云っておられたが、富蔵が在島した期間から考えても、これらはいたみすぎている。おそらくもっと以前のものであろう。流人仏の最たるものだろうか。

また、後方の三体は如来形立像一体と地蔵形立像二体である。前者の高さは約三〇センチメートル、後者は四〇センチメートル位でやはりこれらも、顔、形ははっきりとしていない。彩色もかすかに残っているものも中にはあるが、しかし現在はむしろ木目の跡が美しい。顔には目と鼻の線が残っているだけで衣もしわのあとが少しとどまる程度だが、全体的姿はわかる。とくに一番右の地蔵像は暗い所で見ると、衣の裾と台座の区別がつかず、そのまま衣の延長のように見えるので、一見したところでは、非常に足長のほっそりとしたもののように思える。形が整って美しい。しかし他の二体はむしろずんぐりと無恰好で田舎作である。

実のところ、私がこの島においてもっとも手に取って見たかった仏像というのは、この後ろにある三体であった。この大御堂の中に上がりこんで、暗闇の中にこの三体を見つけた時の私の心の内は、まるで天にも登る気持であったことは云うまでもない。何百年か前に、この仏像たちはだれによって造られたのであろうか。流人が彫ったのにちがいないと信じきっていた私にとって、こんな疑問はすでに消えうせていた。そしてその内の一体を取り出して、自分の手に抱きよせた時に、その木のかたまりは非常に軽いもののように見えたが、実際にはその手応えのたしかさに、それに込められている心の重さを感じとったのであった。

仏像は他のものもそうであるが、それ自身は何も語ってはいなかった。それは木のかたまりであり、単なる石であり、金属であり、それを人間が形を変え、その人間のなにかを封じ込めながら、見やすいようにしただけである。観察者としての人間は、その物体から自己の内なるイメージを勝手に作りあげるだけのものなのだ。

ここにある仏像たちはまたいつの日か、だれか人に見られた時にまた何も語らないだろう。それもそのはず、これらの像には、しゃべるべき口もないのだし、何かを見るはずの目さえあきらかでない

のだ。私たちが語りかけても耳もすでに失われているのだから。それは単に木の変形として存在し、私たちは外から見るだけのもの。

しかし作者は何かを込めたであろう。流人としての悲しみか、やるせない気持ちか、望郷の念か、子供への愛か、罪への後悔か。この像を斧で真二つに割ったら、きっとこめられた何かが空めざしてフワフワと登って行くことだろう。あるいはこのまま、さらに何百年かが過ぎると、これらの像は時の流れにさらされ、またひとまわり小さくなっていることだろう。そしていつの日か、これらが全部なくなってしまう時、けずりとられた魂は一体どこへ行くのだろう。天へ昇ることも出来ずに島の中をさまようのだろうか。

以上で、個人蔵の像をあまり調べなかったことに多少の未練を残しながらも、八丈島の主な仏像についての報告を終わりとする。これがこの島の仏像のすべてであるとは云わないが、しかし他に探しても何かが見つかることもないだろう。

（註）御船預りとは、八丈島の特産物（黄八丈）を上納するために、御船と呼ばれる宮船を預けられ、八丈島と江戸の間を運行した責任者のこと。御船預りは、名主よりも地位が高く収入も相当なものであったという。

五

そしてここでこの島に流された仏師である民部について、少しでも述べなければこの論文を終わりにすることはできないだろう。

仏師民部については、資料も少なくそれも確かなものでないために、これから述べることに関しては、今までにある本の「まとめ」であるということを先に記しておかなければならない。

民部の生没年は、はっきりしていないが、宗福寺にある彼の作品、釈迦如来像の木札に、元禄十三年、四四歳とあるから、それより考えると明暦三（一六五七）年の生まれとなる。しかしまた『一蝶流謫考』[註]の流罪取調べの文書によると、元禄六（一六九三）年に四〇歳とあるので、承応三（一六五四）年とも考えられる。民部は共に流された多賀朝湖（英一蝶）よりも二歳年下であるから、朝湖の生年承応元年から考えると、承応三年の方が正しいことになる。しかし如来像の木札の文字は民部自身が書いたものであろうから、こちらもまちがいではないだろう。どちらとも云いがたい。いずれにしても、彼が流されたのは四〇代を通してのことだったのである。

民部は江戸元禄時代の仏師であったが、その時代が示すように、彼自身相当な遊び人であった。それが島流しの原因であったことぐらいは容易に想像できる。

『龍溪小説』[註]によると

仏師民部は、鎌倉仏師二十二代目也、仏師の名人なりしゆえ、其名世に聞ゆ、元来放蕩者にて遊芸も在りしゆえ、貴人へも立交り、権家の贔負も在りしゆえ、一と廿日光御普請の事に掛り、此事に付同じ掛り合の者を、謀を以て切害し、己れは解死人にならず、江戸払にし事すみ、本庄松平伊勢守殿（栄翁と号）長屋に遊扇と改名し、三年かくれすみしが、後に（三年たちて）石町に住居せり

とあるように、仏師民部は鎌倉仏師二十二代目で、当時は一応仏師の名人として知られていたのであろうが、しかしかなりの放蕩者で毎日、毎日を遊び暮していたのだろう。すでに人を切害して罪にお

われていたことも明白である。

民部が島送りになると同時に、彼の遊び仲間で画家の多賀朝湖（別名英一蝶）と村田半兵衛も同じ罪にとわれて島送りとなっている。しかし彼らがいかなる罪によって、遠島となったのかということについてはいろいろな説があって定まらず、さらに詳しいことはわかっていない。

ここで『龍渓小説』をあるひとつの参考として、その原因について述べてみたい。

彼は江戸払いの間遊扇と改名して、本庄松平伊勢守の長屋に住み、その後石町に住んでいた。そして、多賀朝湖との交わりはさらに深くなっていったがその時二人は百人男という百人一首に似た歌をつくった。その内容というのは、公儀御役人、大名衆、歌舞伎役者、吉原の遊女など人々がよく口にする有名人についてのさまざまなことを書きつらねたものである。それを絵師和翁という字のうまい者が清書して世間へばらまき、はじめは誰が作者であるかわからなかったのであるが、しかし結局三人とも召出されることとなる。取り調べられたあげく、和翁宅にそれの下書きがあったことにより和翁は死罪、しかし他の二人は巧みに嘘をついて無罪となった。

またさらにその後、井伊伯耆守家督を遊所へそそのかしたり、月見の歌開きをするためにそこへ呼んだ三味線ひきや琵琶法師などに合計三百両もの大金を伯耆守に使わせたことである。もちろん人々の噂となり、井伊家重役の耳にも入いり、家への出入りをとめられた。

そして次に本庄安芸守をまたそそのかして遊所へ誘い、茗荷屋の大蔵という遊女を安芸守に身請けさせた。遊扇は安芸守より金千両を受けとり九百両を大蔵身請けに使い、残り百両を祝儀としてはでに使ってしまった。

などなど『龍渓小説』によると、直接の原因でなかったにしても、貴人をそそのかし、彼らが居る所には常に悪い遊びが横行した。また他には、六角越前守の女郎身請けとか『江戸真砂六十帖』(註)によると、同じく越前守の町人殺しであるとか、良からぬ出来事ばかりおこしていたようである。

さらに『龍渓小説』から引いてみると以上のような遊びの後に、彼ら（半兵衛も含む）は北条安房守に召出され、馬が物を云ったということを笑い話として作り流布したという罪によって、二ケ月ほど入牢することになった。こればかりは彼らにとって身に覚えのないものであったが、時は生類憐みの令の時代であった。しかし三人とも病気といつわり出牢したが、養生することもないままに酒を飲み、吉原へ芝居へと遊びあるいていたために、とうとう三人とも再び捕えられ流罪を申し付けられてしまったのである。

上記のことが彼らが遠島になるまでに遊び呆けていた経過である。

彼らがはじめて入牢するのが元禄六（一六九三）年であって、流罪になるのが元禄十一（一六九八）年十二月である。そして約十二年間、民部、半兵衛は八丈島で、朝湖は三宅島で流人生活を送り、赦免されて帰ってきたのが宝永六（一七〇九）年のことであった。

以上『龍渓小説』を含む『一蝶流謫考』であるが、『墨水消夏録』(註)巻の三』には、流罪期間は、元禄六年十二月から宝永六年、原因は諸大名方奥方の器量や善悪や食物の好みについてあからさまに書いた百人女謫にあるという。また『筠庭雑録』(註)によると『龍渓小説』

や『江戸真砂帖』などに書いてある罪をまっこうから否定しているが、理由は書いていない。そして流罪期間も、元禄八（一六九五）年から宝永四年（一七〇七）年赦免によるとしている。宝永四年というのは、この著者の家の日記に宝永五年三月十二日に民部のことが書いてあるということによるものらしい。

民部が帰ってきてからのことについては、また『龍渓小説』から引くが、紅葉山御用仏師を仰せつけられ御細工所頭の支配となって、吹上御庭観音堂の仏像を彫刻したという。

没年ははっきりしないが彼が帰ってきたのが五〇歳を少しすぎた頃であるから、それから十年間ぐらいは江戸にていろいろな方面で活躍したのであろう。『江戸真砂帖』には病死とある。

また次の記事はおもしろい。

比民部は色黒にて菊石面顔也、頬骨高く痩男也し、中々咄相手におもしろく愛敬坊主也、民部申せしは、八丈島にて仏というものを見れば、でくの坊の如きもの也、依之私細工して、島に在し廿年の間に、仏五百躰刻みて、仏というものを初て見せ、島に残し置候、此功徳にても罪障は滅し可申かと申也き、（龍渓小説）

このことからわかるように、民部自身は相当の醜男であったらしいが、口がうまくかなりの自信家であったとみえる。たしかに八丈島の仏像はだれが見ても、でくの坊であるが、しかしどう考えてもあの島に仏五〇〇体というのは、彼の口から出まかせであろう。仏をつくって罪がすべて消滅するとしたらこれほど楽なことはない。

さて、民部の人間性がどうであれ彼が八丈島に残してきた仏像はやはり島の文化にある種のはなやかさを与えたことだろう。

民部は八丈島へ行く途中、三宅島で何ケ月かを過ごし、ここでも仏像を残している。この像は満願寺薬師堂の本尊で薬師如来像である。高さは約七三センチメートル。檜材の寄木造で、左手膝上で薬壺をのせ、右手は前へさし出している。後頭部矧木の内面には墨書で「元禄拾弐年己卯二月廿三日　運慶弐拾五代　大仏像法橋民部四拾弐歳作之」とある。またこの像内には仏頭一個があるが、銘記によると、この古像が大破したので復興像として民部が新しく造ったものである。（以上薬師如来像については丸尾氏調査報告をまとめた。）

さて彼は同年三月には八丈島へ着いたらしい。現在残っている資料をもとに彼の仏像制作について年代順に追っていくことにする。

まず同年十二月十一日の宗福寺釈迦如来坐像。すでに前に述べているからそのものについて語る必要はない。これには民部の名は記されてはおらず、小品であるが小さなノミの跡という特徴から見て彼の作品であろう。八丈島における最も初期のもの。

次に元禄十三年四月十九日運慶末流大仏師民部とある。釈迦如来坐像である。これは三宅島の薬師如来像についで大きなもので、本島に現存する像のうちでもっとも仏像らしい仏像である。

そして、今は焼失してしまったが長楽寺にあった観音立像は元禄十四年の作品。今ある観音様の肩ぐらいの大きさであったというから約七〇センチメートルぐらいで、それほど大きなものでない。

それから三年後の宝永元年、彼が牢に出入りするようになってから十一年、島へ流されてから六年の後に、民部の母が江戸で亡くなっている。それから一周忌にあたる宝永二年につくったのが小さな誕生釈迦仏である。これは色がついておらず今は茶色の光沢を見せている。小さなノミの跡がもっとも顕著に現われて、素朴で純粋な

かんじがする。釈迦というよりむしろ人形のようである。
彼は母の死が相当こたえたのか、これと全く同じものが長楽寺にもあったという。しかし、これも観音像とともに焼失している。彼が島へ来てから七年、五〇歳を目の前にして孤島で彼が見たものは一体なんだったのだろうか。
さて、同年三月に宗福寺関係者の肖像彫刻四体を残す、四体ともまとまった良いもので細かく、仏像とはまたちがった出来上がりを示している。
さらにもう一体、大賀郷・玉置清太郎氏蔵で阿弥陀如来坐像がある。木造で定印を結び丸尾氏によると銘記などは知られていないが総合的に見て民部作であるらしい。
以上、現存するものと過去においてはっきりとしているものを含めて計十二体がある。彼の云う五〇〇体というのは少々オーバーであるにしても、今以上の数はあったのであろう。
ここで彼の作品を見ながら「大仏師民部」について少々の批判を加えなければならない。
丸尾氏は述べている。
肖像と仏像といずれが民部の正体というか民部彼自身であるかというと、この肖像一群の方において民部を見たくなる。こういってしまえば「人形」のような細工物細工物としたものに民部の価値を認めたい。
まさにその通りである。自称運慶二十五代大仏師民部は仏師にあらず、単なる彫刻家であった。時は江戸元禄もっとも華やかで堕落した時代において、仏像にはすでに新しい気運の必要は全くなく、惰性として続いた仏教にとって飾りとしての存在しか与えられなかったのだ。彼が云う「八丈島にて仏というものを見れば、でくの坊の如きもの也」と。よって彼は細工して五百体を島に置いてきたのである。交通不便な、そして現代とちがって情報の少い孤島においては、江戸から来た少々技術を身につけていた者は、それが本物でなかったにしても、目立つ存在になることができた。民部にかぎらず流人の中で知識を持っていた者は、その気にさえなればだれだって中心者となることが、この島においては許されていたのである。
仏師民部は、鎌倉仏師二十二代目也。仏師の名人なりしゆえ、其名世に聞ゆ。
彼は江戸において有名であったらしい。しかし有名とは仏師の名人であったから有名であったのか、これは方便である。彼が有名であったのは遊び人としてであり、仏師というのは単なる仕事上の名であったにすぎない。と思われる。遊び人として有名であった者がこの辺地において技術をもってして花を咲かせることができたのである。仏師としての民部を見るのであるならば、この遠島生活はある意味において良い経験であったといっても過言ではないだろう。
江戸時代において仏師とは一体なんだったのだろうか。民部を見ているとこういう疑問を抱かないわけにはいかなくなる。仏教へのもっとも身近かな掛け橋が仏像であるのならその仏像をつくる仏師はより熱心な仏教徒でなければならないはずである。しかし仏像が単なる美術であったなら、そこには彫刻家としての意識がありさえすればよい。現在私たちはそれを美術として見ることの方が多い。しかし江戸時代の人間たちは隠れキリシタンでもないかぎり仏教徒であるのだし、それを美術として見ることが可能であったのだろうか。すでに細工物としての彫刻がスタートしている時代ではある

が、仏師というのは彫刻家の代名詞であるのだろうか。

おそらく、遊び人、放蕩者である民部にとって遠島十二年の経験は、苦しいがひとつの方向付けへの良い出来事ではなかったのか。そういった意味で赦免されてからの仏像を見ることができないのは残念である。ひとつだけ許されることがあるとすれば、彼は水汲女なか、子供たちとなかの弟夫妻をも引き連れて帰ったということである。彼の目は今までとはちがった別な方へと向けられていたにちがいない。

（註）『一蝶流謫考』、『墨水消百録』、『江戸真砂六十帖』、『筠庭雑録』はそれぞれ参考文献にのせる。また『龍溪小説』は小宮山杢之進の著で『一蝶流謫考』より転載した。

六

以上、八丈島の主な仏像について報告しまた民部について述べたのであるが、これを単なる報告書としないために若干の書き加えを行いたい。

当然のことであるが、八丈島の仏像に美術史的価値を見い出すことはできなかった。この島にあるものは文化の中心地から風によって送られた塵にすぎないのである。しかしそれはこの島にかぎったことではなく、地方においてはあたり前のことと云えるだろう。不思議なことに、こんな島においても仏像は存在していた。なぜ存在したのか。必要であったのか。自然と内地から伝えられるべくしてやってきたものなのか。

私は初めこの島の仏像に美術史的価値を求めるよりも、島民たちが仏像に寄せる心に価値を見い出したいと思った。美術史的価値をこの島の仏像に求めることはそもそも無理なことで、第三者の目を通してこれらを見つめることははじめから出来ないと思った。なぜなら、八丈島に生きている人々は他ならぬ彼ら自身であり、その当時の人々はそれなりの生活に応じて仏像を見てきたからだ。それに対して現代人の、他国の人が決める美術史の価値とは全くそれこそ価値のない関係のないものなのである。彼らには彼らの生活があり、仏像があったのだ。

人間とは苦しければ苦しいほど何かにすがろうとする。生活条件のきびしい島民たちは何かにすがらなければ生きていけないのは当然であろう。その信じるべきものが、ただ偶然にも仏教であっただけのことなのだ。彼らにとっての価値とはこの島の生活における価値なのである。

初めての仏師らしい仏師民部の像は、この島にとって確かに画期的なものであった。仏を彫る文化人の到来である。まちがいのないしっかりとしたノミの動きに人々は感心したことだろう。これが本物の仏像である。より深く仏像に陶酔したにちがいない。

しかし、このような考え方は私の勝手な思いちがいであると気付かずにはいられなかった。なぜならこの島にあるいいかげんな仏像を見ればわかることだ。たしかに彼らの信じるべき宗教は仏教であったけれど、この島には変わった風俗、習慣が多く存在した。それらはうまく共存してきたのだし、共存させてきたのは彼ら自身なのである。つまり仏教を信じてきたことは確かであったけれど、この絶海の孤島の生活は熱心な仏教徒になるよりも、さらにきびしいものだったにちがいない。食べて行くための生活の方が彼らにとってはより重要なもので、仏像を拝むという行為はその次のことだっ

た。いくら生活条件がきびしいものだからと云って、真に頼るべきものは仏教ではなく、彼ら自身の肉体と力であったのだ。それはあくまでも余裕が出来た時にはじめて彼らの心に入ることができたのだ。

だから仏像は、ただそれらしくありさえすれば良い。もともと日本人とは偶像崇拝の好きな民族である。自分たちが信じるものには、あくまでもその対象となる具体的なものが必要なのである。それが本物であろうとなかろうと、彼らの目で見た時にそれらしく写ればそれでよいのだ。単に仏教というよりも、それは彼らの宗教なのである。

江戸の生活を知っている流人、本来の生活ではないこの島で暮す流人たちは別としてもこの島の住人たちにとっては、仏像とは結局偶然の偶像崇拝の対象であったにすぎないのだ。外に対してはオーブンであった島民たちはあるひとつの情報として仏教を受け入れたのではないのだろうか。この島の仏像というのは、すべてそういった島民たちの意識の上に存在するのである。

八丈小島の脇を通って東京へと向う船の上から見た八丈島はだんだんと小さくなり、たしかに孤島へと姿を変えていった。

ささやかなあとがき

ようやく長い論文を終わりにすることができたが、なにしろ参考資料が全くないため、かなり独断と偏見に満ちた内容になってしまった。ある程度丸尾氏に影響された面もあるが、しかし彼のものはあくまでも参考にすぎないと思っている。

主なものは全部やったつもりであるが、個人蔵のものは、その人の家を探すのもむずかしかったし、おっくうさも手伝ってあまり調べることができなかったのが残念である。しかし、完全に交通不便なこの島を自分の足で歩いて調べることは、しんどかったが結果的には充実したものであった。それにしても、あの島の住人たちは本当に親切で気やすく応じてくれた人ばかりで気が楽であった。心の底からありがとう。

なお末吉地区は特に記すべきものがなかったのではぶいた。ではこれにて。

年積月十五日

参考文献

○伊豆諸島文化財総合調査報告　東京都教育委員会
第一分冊「三宅御蔵島の彫刻」
第三分冊「八丈島の彫刻調査報告」　丸尾彰三郎
なお次の像に関して載せた古文はこれから抜粋したものである。
宗福寺・霊感像、釈迦如来像二体、大日如来像
長楽寺・観音立像、観音立像（民部作）
大御堂・銅造阿弥陀三尊像、木造阿弥陀三尊像
○八丈島誌　八丈島八丈町教育委員会
○八丈島流人銘々伝　葛西重雄・吉田貫三第一書房
○伊豆七島と小笠原　ブルーガイドブックス編集部
○日本の彫刻　久野　健　吉川弘文館
○日本随筆大成　第四巻　日本随筆大成刊行会
「筠庭雑録」　喜多村信節　国書刊行会
○燕石十種第一　蘭洲東秋瓢
「墨水消夏録巻の三」　江戸真砂
「江戸真砂六十帖巻の二」　国書刊行会
○続燕石十種第一　涼仙老樵
「一蝶流謫考」